



朝吹真理子

〔あさびきまりこ〕古語を生かした物語性豊かな作品世界で注目される。作品に「流跡」「家路」「きことわ」などがある。

スカートの下に学校指定のジャージを履き、革靴を脱いで机のパイプのうえに足をのせ、あしうらのツボが当たるようパイプをぐいぐい押し付けながら、授業をうけていた。硬い椅子、靴下ごしにつたわるパイプのひんやりした感触は十年以上たつてもはつきりおぼえている。教室のあった三階の窓からは背の高い広葉樹が茂っていて、それをながめるのが学校にいるほとんどの時間の過ごし方だった。教科書はひらいていたが、メモはとらなかつた。以前掃除をしたときにみつけた国語の教科書の余白には、黒いボールペンで「えみびよんFカップなの?!」という隣の生徒にあてたメモが残っていた。至極他愛ない話をしているうちに授業時間は過ぎていった。窓をみるのに飽きたら、本を読むか、寝るか、友達へのメールを携帯で書いていた。数学の時間は、碁を題材にした漫画か、谷崎潤一郎を読んでいた。化学、生物、歴史の授業は、メモはさほどとらないが、耳だけは傾けた。

国語の授業でよくおぼえているのは俳句の授業で、分け入つても分け入つても青い山、という種田山頭火の一句を、初夏に習った。そのときはさして俳句に関心はないのだが、季節の青さによく合っていて、その自由律が頭から離れなかつた。家に帰るとサマーセーターを脱ぎ捨てて、本棚にあった現代俳句の本を手にとった。切株やあるくぎんなんぎんのよる(加藤郁乎)、湯豆腐やいのちのはてのうすあかり(久保田万太郎)、じゃんけんで負けて蛍に生まれたの(池田澄子)、微熱あるひとのくちびるアマリリス(吉岡実)、いくつもの句をおぼえるきつかけになつた。関心はしだいに松尾芭蕉へとうつつてゆき、芭蕉を訪ねる旅をしたり、俳諧七部集を音読したりするようになった。一句知ることは、その文芸の歴史に繋がることで、あらゆる読むよろびへと繋がっていることを、そのとき体感したのだった。

青い山



〇先生と苺大福

通っていた女子高の、通りを挟んだ向かい側、老舗の和菓子屋さんがあった。月に一度だけ、普段は百五十円で売っている苺大福が百円になる。買いにいききたいけれど、休み時間は外出禁止。放課後まで待って、売切れてしまふ。そこで白羽の矢が立ったのが、現代文の〇先生だった。

「〇先生に買いにいらしてもらおう」誰かが言い出して、次の瞬間にはクラス中から大量の百円玉が集まっていた。〇先生は背が低く、声が小さく、いかにも気の弱そうな中年男性だった。頼めば断らなそう、ほかの先生にもチクらなそう。悪い言いかたをすれば、〇先生はなめられていた。期待を裏切らず、先生は預けられた百円玉を山ほどの苺大福に変えて、おずおずと教室に現れた。翌月も翌々月も、わたしたちは先生に百円玉を預け、和菓子屋へと走らせた。ところが翌月には、「大福のことがほかの先生にばれて、〇先生が怒られたらしい」と噂が広まり、わたしたちは月に一度のお楽しみを諦めることになった。次の現代文の授業に現れた先生は、普段からうつむき気味で、何か恥じ入っているような感じなのに、さらに恥じ入り、縮こまっているように見えた。そういう先生を前にして初めて、「悪いことしたな」という気持ちが湧いてきた。優しいひとを、利用してしまつたな。若い、大きい声で、弱い、小さい声を負かしてしまつたな。

古文や漢文で読んだ作品はすぐ思い浮かぶのに、〇先生と一緒に読んだはずの現代文の教科書の内容は、苺大福の記憶が圧倒的で、何も思い出せない。ただ、どんな著名な作家より、本当は名前も忘れてしまつているこの仮名の先生みたいなひとこそが、わたしがものを書くようになるまでの過程で欠けてはならない重要なひとだったのじゃないかと、いまでも思っている。



青山七恵

〔あおやまななえ〕「友達」や「家族」のような言葉では捉えきれない人と人との関係性を、淡く繊細な文体で描き出す。作品に「ひとり日和」「かけら」「魔法使いクラブ」などがある。